日本地理教育学会　11 月例会（ハイブリッド）

1　期　日　11 月 11 日（土）14:00～16:30（対面開催）
2　会　場　獨協大コミュニティスクエア（対面で参加される方）
　　＊大学正門から 2 分の新しい施設です。
3　テーマ　「地理オリンピックと中高等学校地理教育」
4　主　催　日本地理教育学会集会委員会
5　共　催　獨協大学環境共生研究所
6　内　容　日本が組織的に国際地理オリンピックに参加してから 16 年が経過し、国内的に認知されるようになった。国際地理オリンピックは世界的な地理教育の水準を示すと考えられているが、日本の地理教育とのかかわりについて検討していく。
7　プログラム

開会の挨拶　秋本弘章（日本地理教育学会集会専門委員長 獨協大）
会長挨拶　　池 俊介 （日本地理教育学会会長 早稲田大）
趣旨説明　　浅川俊夫（東北福祉大）

発表
佐藤弘康（東京大）：国際地理オリンピック世界大会に参加して

林靖子（獨協埼玉中高）：マルチメディア試験と大学入学共通テスト

清水大介（東京都立八王子東高）：WRT の特徴と論述試験

井上明日香（神奈川県立希望が丘高）：FWE と中学校高等学校における FW の実践

コメント　　澤岡知広（埼玉県立浦和高）
　　竹内裕一（開智国際大）
総合討論　　司会　大谷誠一（平塚市立山城中）
閉会挨拶　　大竹伸郎（獨協大・環境共生研究所主任研究員）

趣旨説明

浅川俊夫（東北福祉大）

今年の 8 月、4 年ぶりの対面形式により第 19 回国際地理オリンピックバンドン大会が開催された。日本が国際地理オリンピックに参加してから 16 年が経過する中で、今回の大会でも代表選手 4 名のうち 3 名がメダル獲得の成果をあげてメディアに取り上げられたり、国内予選の出場者が 1500 名近くになったりするなど、国内でも地理オリンピックの存在が広く認知されるようになった。この間、日本の学校教育では 2 回の学習指導要領改訂があり、従来からの知識獲得をめざす学習指導に加え、思考力や判断力、表現力を培う学習指導が重視されるようになった。地理教育においても、高校での「地理総合」必履修化に代表されるように大きな変化がみられ、内容的にも国際地理オリンピックが示すとされる世界的な水準に達しつつあると考えられる。

こうした状況を踏まえて、本例会では、日本代表選手が感じた国際地理オリンピックの特徴や、国際地理オリンピックで出題されるマルチメディアテスト、記述テスト、フィールドワークテストの 3 種類の問題を手がかりとした日本の地理教育の現状報告などをもとに、国際地理オリンピックを通してみる日本の地理教育の課題や今後の在り方などについて議論を深めていきたい。

発表 1

佐藤弘康（東京大）：国際地理オリンピック世界大会に参加して

私は中学二年次より地理オリンピックに参加し続け、昨年の国際地理オリンピックに出場した。また、高校で正規の地理教育を受けなかったということもあり、中学地理を超えた内容のほとんどについては、地理オリンピックを見据えた学習という形で習得した。こうした立場として、学習者側の視点での、地理オリンピックと中高地理教育の関連についてお話しする。

国際地理オリンピックには大きく 3 つの試験内容があり、その形式は日本の科学地理オリンピックにおける第 1 次選抜・第 2 次選抜・第 3 次選抜にそれぞれ分配されている。このうち第 1 次選抜は、四択問題 60 問程度からなるマルチメディアテストであり、大学入学共通テストと比較的類似性がある。しかし、第 1 次選抜及び国際地理オリンピックのマルチメディアテストは、大学入学共通テストと比べて要求される基礎知識量が少なく、代わりにほとんどの受験者が初めて見るような図表や資料が提示されることが多いように思われる。すなわち、地理オリンピックのほうがより地理的思考を重視しているようである。こうした地理的思考への重みづけの強さは、第 2 次選抜（論述問題）や第 3 次選抜（フィールドワーク試験及びまちづくりの提言）、国際地理オリンピックにも共通している。このような特徴を持った地理オリンピックを見据えて学習を進めてきた私は、地理的思考の精緻化に学習

の重点を置き、実際それはある程度の成功を収めたように思われる。一方で、問題を解くという行為において私が最後まで苦戦した要因は、地理的思考の大前提となる知識量の不足であった。

昨今の地理教育は、知識を詰め込む形式から地理的思考を育む形式への転換を図っている。課題解決能力の育成という点において有効であるこのような形式の教育には、地理オリンピックを大いに活用できると考えられる。一方で、地理的課題の解決を見据えたとき、思考の前提となるに必要十分な知識事項を明確化し、これを学習者に適切に提供することも大切であろう。両者のバランスをどう取るか、どの学習段階でどちらをどれだけ配分するのが望ましいか、など、難しい問題が山積しているように見える。地理教育のプロフェッショナルである先生方の前で恐縮ではあるが、学習者の視点を少しでも共有することができれば幸いである。

発表 2

林靖子（獨協埼玉中高）：マルチメディア試験と大学入学共通テスト

国際地理オリンピックの試験は，一部のエリート中高生が受験するものであろうか。本発表は，国内予選の第一関門であるマルチメディア試験および世界大会のマルチメディア試験（以下，MMT）の構成や内容等について，大学入学共通テスト（以下，共通テスト）との比較を行う。そして，地理を教えていらっしゃる先生方の日々の授業において何かしらのヒントを与えることができれば幸いである。

国内予選のマルチメディア試験および MMT は，60 分 50 問・4 つの選択肢から構成された試験である。共通テストは 60 分 30 問程度で，全て選択問題であることから，これらの試験の問題構成は似ていると言える。世界大会は，主に①気候と気候変動②災害③資源④環境地理と持続可能な開発⑤地形，景観と土地利用⑥農業地理と食料問題⑦人口⑧経済地理とグローバル化⑨開発地理⑩都市再開発と都市計画⑪観光⑫文化地理と地域アイデンティティの 12 のテーマから出題されることが公表されている。当然，世界大会は英語での出題であり，国内予選のマルチメディア試験も 2 割が英語で出題されるが，内容的には中学社会科地理的分野や地理総合，地理探究で学習するものと大差はない。MMT の過去問題は http://www.geoolympiad.org/内の”PREVIOUS IGEOS&PAST QUESTIONS に pdf で公開されている。試験問題作成や教材研究のヒントに活用されたい。

発表 3

清水大介（東京都立八王子東高）：WRT の特徴と論述試験

本報告は、日本選手権ＷＲＴにおける受験者の解答を分析した上で問題内容を検証するとともに、ＷＲＴと大学入試問題の特徴を探ることで、本例会のテーマである「地理オリン

ピックと中学・高等学校地理教育」に関する議論の足掛かりとすることを目的とする。

受験者の解答分析及び問題内容の検証は、2020 年度実施のＷＲＴ(第 15 回)大問Ｅ「地域調査と地図の活用」の日本語問題を対象とした。受験者の解答を分析すると、大問の得点率は約 40%であり、全体としては無解答の設問は少なかった。しかし、提案型の説明式問題では無解答者が約３割を超えていた。また、識別指数から問題を検証した結果、小問７題中の６題で識別指数が 0.25 以上(識別力が高い)であり、うち３題は 0.5(特に優れた設問)を超えていた。このことから、本問は得点上位者と下位者の弁別に適する大問であるといえる。

ＷＲＴと大学入試問題の特徴分析は、2022 年実施のＷＲＴ(第 17 回)と国公立大学二次試験問題(15 大学 18 種類)を対象とした。大学入試問題の特徴として、説明式問題の割合は 100～9%と大学ごとに大きく異なり、複数の提示資料を活用して多面的・多角的に考察させる設問は少ないことが挙げられる。これに対して、ＷＲＴは説明式問題が約７割を占め、類型化や提案型の設問も認められた。そして、大学入試問題と比べると資料数がかなり多く、説明式問題の約６割が、複数の資料を活用して多面的・多角的に考察させる設問であった。

今後は、継続的なＷＲＴ問題の検証とともに、国際的な地理教育の潮流を体現しているＷＲＴ問題(過去問)を授業でも積極的に活用することで、学習指導要領で示された「地理総合」・「地理探究」における資質・能力の育成に寄与することが可能ではないだろうか。

発表４

井上明日香（神奈川県立希望が丘高）：FWE と中学校高等学校における FW の実践

地理オリンピックのフィールドワーク(FW)では、以下のような力が求められる。地域を観察したものを地図で表現する力、地域の課題を捉えその課題にどのように向き合うか提案する力である。このような力は本来であれば、学校の地理の授業を通して身につけるべきであり、FW の充実が求められている。しかし、現状として中学高等学校において、十分な FW の機会があるとはいいがたい。本発表では地図作成能力や、地域の観察力、問題解決能力といったスキルをどのようにして養うのかということについて提案したい。

報告者が高等学校の教員であることから、必履修科目である「地理総合」の授業をベースにどのような授業ができるのか発表する。学習指導要領では「地理総合」の目標に、「地図や地理情報システムなどを用いて，調査や諸資料から地理に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付け」、「地理に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究，解決しようとする態度を養う」など示されている。それらのスキルを学ぶ学習項目として「生活圏の調査と地域の展望」が設定される。実際に校外へ出て FW を実施することが理想ではあるが、今後も様々な制約から FW の実施率をあげることは現実的には難しいと推察される。その中でどのような工夫ができるのか、地理オリンピックの国内予選で実際に使用した問題を参照しながら、提案をさせていただきたい。